

先人達がこの地に住みついてから幾星霜の歳月が流れた。そして人々が住みつくと同時に、この土地に独自の文化が生れ育くまれた。

今、私達は、その大浦の風土の中でくらししている。それは先人達が長い間に創り上げた文化の中のくらしである。

河北潟周辺の地である大浦は湿地帯であり、かつては縦横に水路が交叉し、水鳥が羽を休める自然の宝庫であった。その中でくらしは、小舟を運搬手段とした米作りの歴史であったと言える。

雪にうもれた冬の日、来る年への豊作を念じつつ、縄ない、俵編みなどの冬仕事やその合間に競いあったわら細工、作業衣のつくろいに精を出した日は、そう遠い昔ではない。また、この地域の人達が最も誇りにしていた、竹棹一本で小舟を自由にあやつる技術を持っている人達や、農閑期、田んぼ仕事の合い間に、小舟を利用して川魚を捕える名人達の技術を伝える人達も少ない。自動車、トラクタ、コンバインによる農業には、冬仕事も、舟をあやつる技術も必要となくなつたのである。

これらの風景が消え、農作業の文化が一変したのは何回かによって行なわれた土地改良事業と日本経済の発展であった。くらし中からの伝統の技が消えていくのは、戦後の日本の至る所で辿ってきた道と同じくこの大浦とて例外ではない。

そのなかで生産技術の変化による伝統文化の喪失と違い、くらしの中で続いて来た、伝統行事や習慣は、形を変えながらも連綿と続いている。獅子舞、地蔵盆、報恩講などがそうである。しかしながらこれらの文化も若い人達の価値観の違いなどから、今後の継続についても問題を投げかけられてきているのが現実だ。

数回にわたる土地改良事業は、農業の姿を変えると同時に、土地の利用も変えてしまった。工場や住宅の進出が可能になり、新しく転入して来た人達との交流が始まり、地域社会の連帯が大切な時代となつてきている。これは、過去の集落のみの文化から脱去し地域社会全体の文化を創造する事に外ならない。

ともあれ、人々の歴史の中に息づいてきた伝統の行事が一つずつ消えようとしている反面、新しい行事が生まれようとしている。

新しい伝統の文化の創造とともに、次の世代へと引継ぐ文化を残す事が必要な現在である。

(東蚊爪町・小川祥夫)





19



18

18 ハサに掛けて自然乾燥する風情も少なくなった
19 秋の刈り入れの一番は話しもはずむ

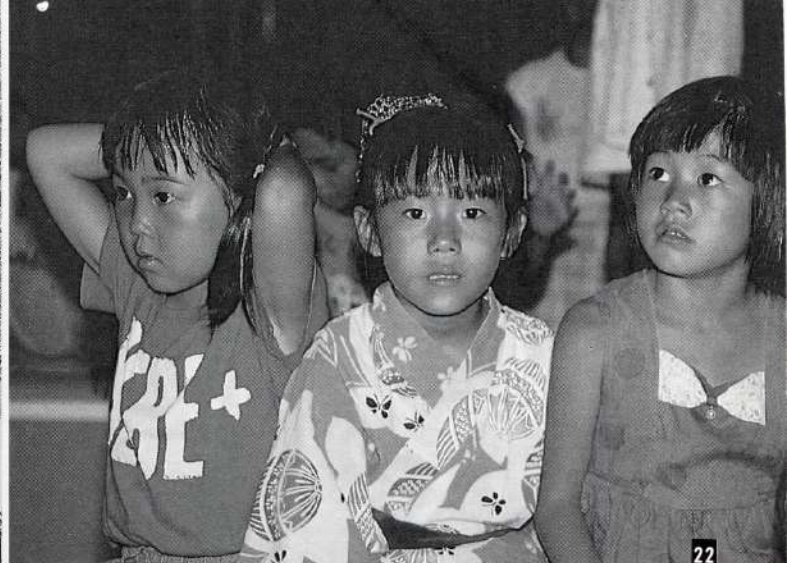


20



21

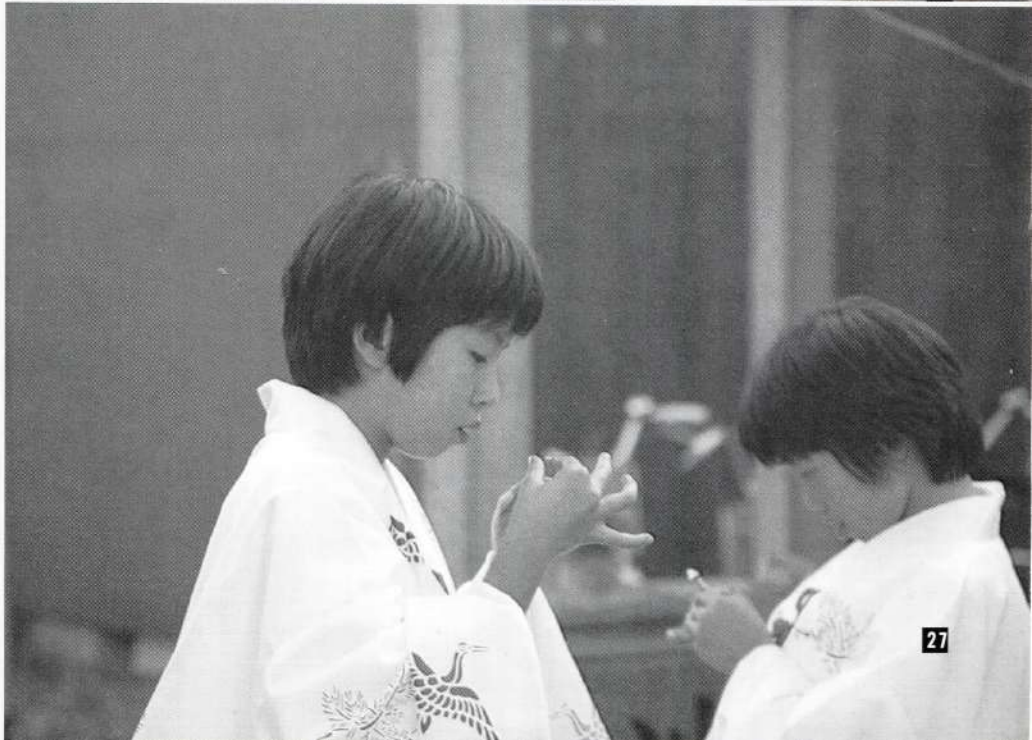
20 雪が解けて春になると総人夫の江ざらい
21 バスを待つひととき

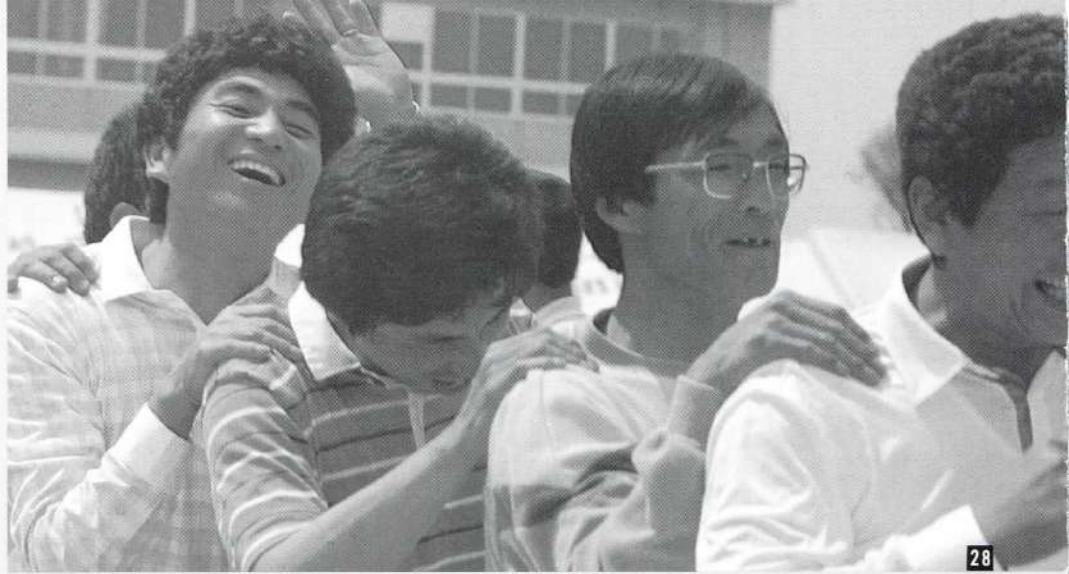


- 22 保育園の盆踊り
23 東蚊爪町での地藏盆のお参り、夏の風物詩
24 夏休みの子供たち



25





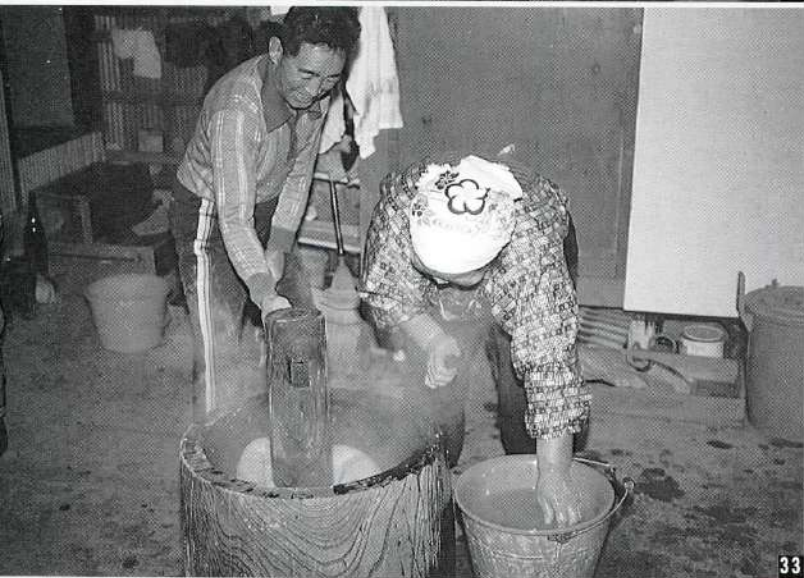
- 26 木越町獅子舞連中の昼食のにぎわい
27 出番前の巫女さん
28 足並み揃えてむかで競争、社会体育大会のお父さん達
29 木越団地秋のフェスティバル、みんな友達だ



32



30



33



31

- 30 マキをくべて五右衛門風呂をわかす
 31 報恩講での仏法談議に花が咲く
 32 もうじきお正月、おばあちゃんおいしいかぶら寿司
 をつくってね
 33 二人の息もびったりと、お正月の餅つきが終れば年
 越しだ



36



34



37



35

- 34 冬場の仕事、藁縄作り
35 練炭を囲んでカキモチを焼きながら、茶飲み話に花が咲く
36 花嫁さんは果報者、鶴亀の藁細工を伝える人も少なくなった
37 マント姿も健在だ